

米・ソ外交史概説

清 水 良 三

目 次

- (一) 米ソ両国の類似点と相違点
- (二) 米国の独立期よりアラスカ売買まで
- (三) 十九世紀末の亀裂から日露戦争まで
- (四) 第一次世界大戦期
- (五) シベリア出兵の影響
- (六) レーニン外交の発端からスターリン時代へ
- (七) 第一次大戦の終了から米国のソ連政府承認迄

(一) 米ソ両国の類似点と相違点

一九四五年までは、ロシアとアメリカ合衆国は、世界の中心であるヨーロッパの両翼のような立場を占めていた。それまでは、世界政治すなわちヨーロッパ政治であったから、ヨーロッパが他から一つの客体として眺められるとい

うことはなかった。ところが、一九四五年以降、ヨーロッパは数百年間のうちではじめて政治の中心ではなくて政治の客体となった。そしてワシントンとモスクーの紛争は、そのまま世界問題となるという波及的効果をもつようになったのである。

十九世紀の英国の首相パーマストン卿は、「英国政府には恒久の友も恒久の敵もない。あるのは、ただ恒久的利害関係だけである」と語ったことがあるが、帝制ロシアも其の外交政策を遂行するにあたって、このパーマストン流の考えにしたがった。アメリカ合衆国の外交当局者は、屢々道徳的な言辞を用いたけれども、其の外交政策の基底には、やはりパーマストン流の考えが流れていたのである。一九一七年までのロシアとアメリカ合衆国の関係の鍵は、両国とも同じ第三国によって脅威を受けていると感じていたことであり、それ故に相互に援助し合うという傾向があったことである。其の第三国とは、十九世紀においては当時の支配的な国家であった英国であり、二〇世紀においては、ドイツおよび日本であった。

ロシアもアメリカ合衆国も、共に大陸国家であり、広大な地域と豊富な自然資源をもっている点では共通していた。両国はまた太平洋にまで其の領土拡張の手をのびし、国内においてやるべき仕事が山積していたので、それ以上の勢力拡張に対しては、あまり関心を示さなかったのである。このことは、ロシアにとってよりも、アメリカ合衆国にとって、より多く真実であったということが出来るであらう。ロシアの西側の国境はたえず侵略の危険にさらされていた。それ故、ロシアは其の西側国境の防衛にたえず注意をうばわれていたのである。だが、両国の対外関係意識は基本的に相類似していたのであり、両国とも国内において充分な土地と資源をもっていたから、両国の外交政策の基本的目的は、彼らももっていたものをまもり保持し且つ発展させることであった。

さらに兩國は共に辺境を有する国家であつたし、ヨーロッパ文化の面からみると、ヨーロッパ文化の元来の当事者というよりも、むしろ其の娘であつた。ロシア人もアメリカ人も共に精神的であり広大な空間と広々とした地平線を有しており、友情と親切心を持ち、自分たちが他国民よりも大きく他国民よりも強力で、しかもすくなくならず他国民よりも有徳であるとの意識をもっていた。別の言葉でいえば、両国民とも「偉大な未来についてはっきりとした使命観」をもっていた。先見の明あるヨーロッパ人は、既にはやくからこのことに気がついてきた。フランスの偉大な政治哲学者・アレキسس・ド・トクヴィルは、一〇〇年以上も前に次のように書いてゐる。

「現在世界には出発点は異なつてゐるけれども、同じ目的に向つて進んで行く傾向があるように思える二つの偉大な国民がいる。それはロシア人とアメリカ人のことである……この二国民は夫々地球の半分の運命を左右しようとする天の意思を与えられてゐるように思える」*。

以上はロシアとアメリカ合衆国の類似点を述べたのであるが、これらの多くの類似点があるにもかかわらず、この二つの国は常に相互に大幅に異なつていたのである。アメリカの文化は圧倒的にプロテスタントであり、アングロ・サクソン系であつた。一方、ロシアの文化はビザンチウムの文化であり、ロシア正教会の文化であつた。自由主義と民主主義がアメリカの母国・英国において発達しつつあつた時、蒙古人は征服したロシア人に対して暴力と圧力の政治を布いていたのである。ロシアにはルネサンスもなければ宗教改革もなかつた。そして其の近代化の特徴は、英国において示されたような民主主義化にあるのではなく、圧倒的な高度に中央集権化された官僚的な独裁政治化にあつた。そして其の独裁政治はまずツァーたちによって行なわれ、次いでボルシェヴィキたちによって行なわれたのである。

(二) 米国の独立期よりアラスカ売買まで

第二次世界大戦後、ロシアとアメリカ合衆国が世界の強国として直接対峙するまでは、この両国間の関係は、彼らの対内指向的な国家的利害関心の類似性と、彼らの政治哲学、政治組織・社会組織にみられる対照性という基本的な矛盾を反映していたのであった。十九世紀の末に至るまでは、第一の特徴である彼らの国家的利害関心の類似性という特徴が支配的であった。何故ならば其の時まではロシアの独裁政治は、民主主義的な傾向によって重大な脅威を受けていなかったし、さらにアメリカ合衆国はいぜんとしてまったくの弱国であり、外国から干渉されることを極度にきらい、其の「素晴らしい孤立状態」に満足していたので、ロシアが国内で行なっている暴力と圧迫の政治に対する嫌悪心は、合衆国の外交政策において真面目に取り上げられることはなかった。

アメリカ合衆国の歴史の初期の段階においては、英国が世界の指導的な国家であった。そしてワシントン政府もザンクト・ペテルブルグ政府も、英国海上勢力の圧倒的優勢をおそれて、それに対抗すべくお互いに援助し合う傾向をもっていた。アメリカ革命戦争の際にはロシアの女帝エカテリーナは、英国を支援して植民地人の敵にまわることをしなかった。一八一二年の戦争当時においてツァー・アレキサンドル一世は、アメリカ側に有利な調停工作に乗り出そうとしたのであった。それはアメリカ合衆国がロシアにとってのより大きな危険な要素であるナポレオンと同盟関係に入るのをふせぐためであった。トマス・ジェファソンとアレキサンドル一世との間には、丁重な文書の交換があった。そしてザンクト・ペテルブルグ駐在の第一代アメリカ合衆国使節ジョン・クインシー・アダムズは、ロシア

・アメリカ間の友好關係を確立したのである。十九世紀の前半には、両国間にいくつかの緊張關係が発生したけれども兩國間の共通の利害關係は非常に強かったので、兩國關係がそれによって崩壊する事はなかった。一八二三年のモンロー・ドクトリンは、アメリカ大陸がそれ以上ヨーロッパの植民地となることを防止したが、このドクトリンの發表はツアー・アレキサンデル一世によって率いられる神聖同盟が、ラテン・アメリカにおけるスペインの植民地をロシアのために確保しようとするのではないかという恐れによって觸発されたばかりでなく、ロシアの勢力がアラスカの植民地から太平洋岸を南下してくるのではないかという恐れにも觸発されていたのである。だが実際には、ロシア側は既に太平洋岸を南下する計画を放棄していた。さらに一八三〇年と一八六三年の兩度のポーランドの叛乱と一八四八年のハンガリーの叛乱をツアーの政府が残酷に抑圧したことは、アメリカ合衆国内におけるロシアの人氣をさらにわるいものにした。だがそのようなことがあってもなお、クリミア戰爭においてはワシントン政府は、ロシアに同情的な立場をとったのであった。

南北戰爭の勃發はロシアとアメリカの友好關係を最高のものにした。第一次世界大戦以前においてこれほど兩國間の友情がたかまつた時期はほかに見当らない。シウォード國務長官は、「ロシアは他のヨーロッパのどの国よりも我國の友情を克ち得ている。その理由は簡単であつて、ロシアは常に我國の盛運をねがって來ているし、我國が我國の判断で最善と思われるやり方で我國の問題を処理するのを黙ってみていくれるからである」と述べている。ロシアの政策はそれ以前と同じように北側に好意的であつた。なぜならロシア人は、英國海軍の優勢に對抗してバランスをとることの出来る強力なアメリカ合衆国を必要としていたからである。それ故、ザンクト・ペテルブルグの政府は南北間を調停しようとする英仏の努力に執拗に反対したし、南部への援助にも、ずっと反対しつづけたのであつた。ツ

アー・アレキサンドル二世が農奴を解放したこと、しかもその事がリンカーンの奴隷解放と時期が平行していたので、ロシアに対して既に好意的であったアメリカ北部の対ロシア感情は、一八六三年にロシア艦隊がニュー・ヨークとサン・フランシスコを「親善」訪問した結果、一段とたかまった。だがそれからずっと後になって、歴史の研究が明らかにしたところによると、この時ツアー・アレキサンドルが艦隊をアメリカに派遣したのは、彼が英国とフランスとの戦争を懼れたからであり、また、もし英仏両国との間に戦争がおきたなら、彼の艦隊は破壊されるか封鎖されてしまふであらうと思つたからである。だが当時そういうことを考えたアメリカ人はほとんどいなかった。彼らは北部の連合に好意的なデモンストレーションとしてこれを見たのであり、アメリカ人のツアーに対する感謝の念は非常に大きかったのである。南北戦争直後の一八六七年に、当時アメリカ合衆国とロシアとの間の唯一のあり得べき領土紛争の原因と考えられていたアラスカが、七二〇万ドルの価格でロシアからアメリカ合衆国に売られた時に、紛争の原因は除去されたのであった。ザンクト・ペテルブルグの政府がアラスカを売却する決心をしたのは、この地域で捕獲されるらつこ貿易が、もはや利益を生むものではなくなつて来ていたこと、さらに、クリミア戦争中に極東のロシアの海港、ペトロパウロフスクが英仏海軍による砲撃を受けたために、このことは、かりに戦争が勃発した場合に、ロシアがアラスカを防衛することは不可能であることを示している様に思われたからであった。帝国主義的な勢力拡張に熱心であったシウオード國務長官は躊躇する議會を説得して、遂にアラスカの購入に賛成させた。当時アラスカの購入はシウオードの愚行と評されたが、この売買の成立のかけには、ワシントン駐在のロシア使節が、指導的な議員たち

に贈賄の形で何らかの側面援助を行なつた形跡がある。

(三) 十九世紀末の亀裂から日露戦争まで

南北戦争当時の頂点に達したロシア・アメリカ間の友好関係が過ぎたあと、十九世紀の最後の数十年間に両国関係は後退をはじめた。これには二つの原因があった。第一の原因はツァーの政府がユダヤ人を迫害したこと、特に血なまぐさい組織的な虐殺を行なったことが、アメリカの世論に好ましくない影響を及ぼしたことであった。この時、数百万のユダヤ人がアメリカ合衆国に逃亡した。そしてアメリカ人の反ロシア感情を強化したのであった。かくて、一九一二年に議会の圧力をうけたタフト大統領は、米露通商条約を廃棄した。第二番目の、もっと重要ではあるがもつと一時的な原因は、中国に関してロシアとアメリカとの間に競争関係が生じた事であった。当時中国に於てはロシアは南進しつつあり、アメリカ合衆国は商業上の利益を保護せんがために、門戸開放政策を維持しようとしていた。

十九世紀末葉は帝国主義の時代であった。そしてロシアもアメリカ合衆国も其の病原菌におかされた。ロシアは満洲を手に入れたいと希望していた。また中国においてまったく優勢な影響力を行使しようとしていた。アメリカはフイリッピンを自分のものとして保持していた。そして中国との通商関係を維持しようとしていた。両国間の緊張関係は非常に大きなものになって来ていたので、一九〇四年に日露戦争が勃発した時に、大部分のアメリカ人は日本に好意的な立場をとった。だが、戦後セオドア・ルーズベルト大統領は、極東における合衆国の利益を防護せんがために、また日本の力が急に強くなって来るのを警戒して、極東におけるバランス・オブ・パワーを維持しようとして決意した。そして両国間の調停に入り、ロシアの損失を予想されたよりも少ないところできいとめたのであった。だが基

本的には満洲においてロシアと入れ替ることによって、日本は戦争に勝ったのであり、そして其の時から一九四五年までは、ロシアではなく日本が東アジアにおけるフランス・オブ・パワーに対する主要な脅威となったのである。それ故、極東におけるアメリカの主要な関心の対象は、ザンクト・ペテルブルグの政府ではなく、東京政府の方針となった。それ故、第二次世界大戦が終わるまでは、極東地域がアメリカ・ロシア関係の障害になることはなかった。さらに、英国はドイツから脅威をうけて、ロシアおよびアメリカ合衆国両国との関係を改善した。かくてロシアとアメリカ合衆国の友好関係の基底にあった反英国的風潮を除去したのである。

(四) 第一次世界大戦期

第一次世界大戦がはじまってから、大部分のアメリカ人は中央諸国（ドイツとオーストリア・ハンガリー）に対抗して、同盟国（英国・ロシアおよびフランス）側に味方する立場をとった。それはアメリカの伝統的な政治的な立場が西側民主主義諸国に同情的であったからであるし、また、もしもドイツが勝つならば、それはヨーロッパ大陸が単一の国家によって支配されることを意味し、そういう状態の出現に対してはアメリカの利権は常に反対であったからである。だがアメリカ人がロシアに対して抱いていた同情は、ツアーの政府の独裁政治に対する嫌悪心で抑制されていた。一九一七年二月の民主主義革命によってツアー・ニコライ二世が打倒された時、この嫌悪心という障害が除去された。そして、ロシア・アメリカ関係はそれ以前においても、それ以後においてもかつて実現した事がないほどの最大の親密関係に到達したのである。戦争中においては同盟国であり、現在では共に民主主義国家である——かよう

な状況下にあつてアメリカ人の熱意は政府のものも民間のものも、ロシアに対してとどまるところなく好意的であつた。それ故、それから数ヶ月後レーニンとボルシェヴィキーたちが権力を掌握したことは、アメリカ合衆国にとって大きな衝撃であつた。ソ連の国家的な利益にイデオロギーの要素が付加され、ボルシェヴィキーたちはアメリカ合衆国に対して敵対的な集団となつた。彼らは無神論的であり、共產主義的であり圧迫的であつた。そしてそれらの態度は、そのどれもが大部分のアメリカ人にとって我慢の出来ないものであつた。さらに悪いことにはボルシェヴィキーたちは、アメリカの軍隊がフランスの戦線に参加しようとしていたまさに其の時において、ドイツに対する戦争からロシアを離脱せしめたのである。まったく、当時のロシア駐在アメリカ大使をも含めて、多くのアメリカ人が、レーニンとボルシェヴィキーたちは、ドイツ側の代理機関であるとの確信を抱くに至つていた。こうしてアメリカとロシアとの関係が悪化の方向をたどりはじめた時、アメリカ合衆国の外交政策に大きな失敗があり、その失敗の故に、ロシア・アメリカ関係はさらに悪化して行つたのである。その失敗とは、第一次世界大戦の末期におけるアメリカの対ロシア干渉であつた。

(五) シベリア出兵の影響

ロシアに対するアメリカの干渉は北部ロシアにおいてはアルハンゲリ斯克において、極東ロシアにおいてはウラジヴォストークにおいて行なわれた。だがロシアに対する干渉の主要な作動者はアメリカ人ではなく、英国人であり、また、それ以上にフランス人であつた。ウイリソン大統領が干渉に賛成したのは、まったく嫌々ながらであり、しか

も反共がその第一次的な理由とはいえない様な、それ以外の理由によるものであった。すなわち、干渉の主要目的は第一次的にはドイツ人に対するロシア人の抵抗を復活させることにあった。そして、第二次的な意味合いにおいてのみ、そして特に英国にとつての目的が、色々なロシアの反共グループを支援してレーニンとボルシェヴィキたちを崩壊させることであつたのである。干渉はあまり重要な性格のものではなく、そして実行の段階でひどくまちがえた処理がなされた。ロシア側の主張によるとこの干渉は、ソヴィエト政權を転覆させようとする広大な資本主義者の陰謀の一部であるということになるが、そういう主張がなされたにも拘らず、事実においては、それはそういう陰謀の一部などというものではなかつた。それどころか干渉は「犯罪よりもわるく、盲目的な愚行よりもわるかつた」。彼らはボルシェヴィキたちにとって、都合のいい罠にはまつたことになつた。そして干渉がなしとげたことといつたら、干渉する方とされる方と両方の世界にとつて最悪のことであつた。干渉は当初かかげた目的のうち、どれ一つとして実現出来なかつた。そして、西側全般、特定国としてのアメリカに対するソヴィエトの敵意を、干渉以外の何らかの方法がとられた場合にそうであつたらうと予想される以上に悪化させたのである。レーニンはロシアの内戦において勝利を収めることが出来た。それは彼が、ロシアが戦争病にかかつてしまつており、戦争から脱出する決心をしてゐることを理解していたからである。彼が内戦に於て勝利をおさめることが出来たのは、彼に敵対する反共的敵対者たちの分裂と無能力の故であり、西側諸國のなまはんかな決心、無能およびやりかたのまずさによるものであつた。

(六) レーニン外交の出發からスターリン時代へ

西側に対するソヴィエトの敵意は大きく、どのような場合でも本質的には譲歩の余地のないものであった。レーニンはロシアの民族主義者ではなかった。彼は純粹の国際主義者であり、彼にとつて國際的プロレタリア革命の要請であると思われるものに、意識的に従つて行つた。すべての社会主義者と同じように、第一次世界大戦前においてはレーニンは、ドイツを社会主義運動の中心であると考えていた。レーニンは、ドイツにおける共産主義革命を、樂觀的な気持で待望していたが、さらに彼は、ドイツにおける共産主義革命の成功は、世界革命の中心をモスコウからベルリンへ移転させるであらうと信じていた。彼の先輩格の同僚の大多数が彼と同じ見解をいだいていた。

だが特にレーニンは、共産主義革命の維持と擴張に関して政治的な實際主義者であつた。彼は権力を握ると、彼の多くの同僚の抱いていたロマンチックな革命的衝動を無視した。そして一九一七年に、多くの領土を譲渡するという犠牲さえ払つてブレスト・リトフスクにおいてドイツと平和条約をむすんだ。一九一九年に共産主義者の叛乱がドイツにおいて失敗し、一九二〇年に赤軍がヴィスチュラ河においてポーランド軍に阻止された時、レーニンは情に動かされることなく、現実的に、「資本主義による包囲」という長期の時代に即応すべく、ソヴィエト側の態勢を整えたのであつた。すなわち、共産主義はロシアという一国においてのみ権力をにぎっている。そして世界の残りの部分はいぜんとしてロシアに対して敵対的であるとし、世界共産主義とソヴィエト國家の利益とを同一視しようとしたのであつた。彼はまた国内問題において自由化の措置を導入した。それはネップと呼ばれる新經濟政策であり、小規模な

私企業に存在の余地を与えたものであった。

スターリンの外交政策も根本的には同じものであった。レーニンと同じ様に彼は、戦略的な目的としての世界革命に献身的であった。そしてそれ故に、ロシアだけが唯一の共産主義国家であったから、ソヴィエト国家の維持と拡大に対して献身的であったのである。だがレーニンと違ってスターリンは、外部世界について殆ど何も知らなかった。

彼は外部世界をまったく信用していなかった。スターリンはグルジアのゴリに生まれ、熱心な大ロシア民族主義者であった。彼はソ連人口の四一パーセントを占める他の諸民族を、ヴェリコルスの支配下においた。さらに国内における血腥さい肅清は、同じような現象を対外政策の面でも、もたらした。それは一九三九年に行なわれたフィンランド攻撃や東部ポーランドにおける諸政策である。簡単にいうとレーニンにとっては、ロシアの国家的な利益と世界革命の利益は、消極的な否定的な意味で平等化されねばならないもので、両者の均等化は、やむを得ず好ましくないものと考えながらの必要性の承認という態度でなされた。ところがスターリンは、ロシアの国家的な利益と世界革命の利益をまったくまぜ合わせてしまい、しかも実際においてはロシアの国家的利益に重点をおいていたのである。

ロシアにおいて共産主義革命が行なわれて以降二〇年間は、外蒙古を例外として、世界において共産主義国家であったのはロシアだけであった。そのためソヴィエトの共産党は、世界中の他のどの国の共産党よりもはるかに強力であった。それ故、ソヴィエトの共産党が世界の共産党の主人公の役割を果すようになったのは、ごく当然のことではあったのである。だがレーニンはこの自然的な優越性を外交によってさらに推進することを躊躇しはしなかった。スターリンは国内の同僚に対してのみならず外国の同僚に対しても神経過敏気味の疑いを抱き、猜疑に疲れはてて、さらに過激な行動に出た。彼はすべての国の共産党の指導者を厳格に、しかも、全面的に彼の政策に従わせることを謀

り強制的にこれを実現しようとした。そして一九三〇年代の半ば以降、彼は情容赦なく共産党の指導者たちを追放し多くの人を殺害し、さらに多くの人を投獄し、これら左翼の人たちを、彼の調子に合わせて踊る無力なあやつり人形に変えてしまった。彼は彼自身のロシア共産党の仲間に対して、他の共産党員に対するよりもひどい扱いをした。一九三五年以降、ロシア共産党員で彼に殺されたものの数は、非常に大きかったことが忘れられてはなるまい。これは彼に對する公平な判断のために必要であらう。

外交問題においては、レーニンと彼のあとに來たスターリンは、二つの優先的事項をもっていた。其の第一は本国における共産主義の基盤を固めることであり、第二番目に、そしてこれは第一番目が実現したあとのことであるが、共産主義の影響力を、そしてそれ故にロシアの影響力を海外に拡めることであつた。この点においてスターリンは、レーニンよりも遙かに遠くまではるかに血なまぐさい前進をした。そして国内においては、压制政治を行なつてソ連の産業の基盤をささぐき、外国に對しても一九三九年以降、同じような压制政治の押し売りを行なつた。

第一次世界大戦が終わり、反共産主義の軍隊は打破されて外国の干渉が終つた時、ポリシエヴィキの政府が行なつた最初の仕事は、ロシアを外交上の孤立から救い出すことであつた。そしてソ連國家に對する継続的な大規模な脅威であると彼らがまちがえて確信させられていたもの、即ち新しい外国の、特に英國の干渉を起り得ないものにするのであつた。ポリシエヴィキたちは二つの大戦の間に、まず第一には他の孤立した弱國・ドイツとの關係を改善することによつて、そして次には、ナチスに對抗する同盟者を西側の中にみいだそうとする努力によつて、この目的を追究したのであつた。そしてこれは、スターリンの人民戦線の政策として知られている。

だがこの政策は二つとも成功しなかつた。その理由はまず第一に、それらの政策のもつイデオロギー上の性格であ

った。ワイマール・ドイツとのソヴェエトの親善関係の樹立は、両者が共に反ポーランド政策をとるといふ基盤の上になり立っていた。だがこの政策は両国のイデオロギー上の相違によって制限されていたのである。ヒットラーの勢力が勃興しはじめた時、スターリンがドイツ共産主義者たちに闘争相手としてえらばせたのは、ナチスではなくて社会民主主義者であった。もしもスターリンがロシアの国家的利益のみを求める政策を遂行していたならば、彼はむしろ社会民主主義者たちと同盟関係に入り、そして其の後、西側と同盟関係に入ったであろう。そしてもしもスターリンが其のような政策を追究していたならば、ヒットラーの勝利は避けられたかも知れないのである。まったくのころ、英国とフランスおよび多くのアメリカ人は、スターリンよりもむしろヒットラーを好んでいた。あるいはすくなくとも、両者がたたかかって共に滅ぼし合うことを希望していた。だがこういう考えも、ソヴェエト政策のうちのロシア的な側面に対する反応よりも、共産主義的な側面に対する反応から生まれて来たものであった。だがこれらの西ヨーロッパの人たちは、西側の世界においても東側の世界においても、最悪のものを手に入れることになった。すなわちヒットラーを打倒することによって、彼らは彼ら自身を弱化せしめると共に、特に一九四五年には、彼ら西側ではなくロシアが、東部ヨーロッパおよび中部ヨーロッパの多くを、其の支配下におさめることを招来したのである。

極東におけるソヴェエトの政策も、そう大した成功をおさめた訳ではなかった。ここにおいてもイデオロギー上の偏向とスターリンの失敗が、部分的に其の不成功の原因をなしていた。レーニン是最初ツァー時代から受けつがれて来た中国におけるロシアの特権を全面的に放棄したけれども、中国の弱さがソヴェエトの干渉をほとんど不可避的なものにしたのである。そのソヴェエトの干渉が、かりに共和主義的中国によってもたらされた権力の空白を日本が利用することを防ぐことを目的にしたものであったにしろ、こういう意味でソヴェエトの干渉は、殆ど不可避的であつ

た。ソヴィエトの影響力は外蒙古において圧倒的なものとなり、特に新疆省において大いに力をふるった。そしてモスコ政府は、満洲における東支鉄道の管轄権を保持した。

一九二〇年代の初期および中期にスターリンはさらに前進しようとした。そして其の過程において大きな失敗をおかした。孫逸仙の指導のもとで未だ若々しかった国民党の動きは、レーニンが帝制時代のロシアがもっていた中国における特権を放棄したことや、新しいソヴィエトの組織が中国の政治的経済的發展にとって、また外国の影響から独立しようとする中国にとって、一つのイデオロギカル・ティプスを示しているように思われたことが理由となつて、ソヴィエト側に惹きつけられた。逆に西ヨーロッパで其の進出を阻止されたレーニンとスターリンは、アジアに向きを変えた。そしてモスコ政府はアジアおよび其の他の地域における反植民地政権を援助すべきであるとの確信をいだいた。この援助は、たとえそれらの政権が反共産主義的であっても与えられるべきものとした。それは西側帝国主義の影響力とたたかむがためであり、最終的には共産主義革命を実現するための道を準備せんがためであった。こういう方針は、スターリンが当時中国における最も強力な外国であった英国に対して抱いていた恐怖心によつて、さらに強化されたのであつた。彼は当時まだ幼なかつた中国の共産党を国民党の中に混入させた。そして孫逸仙が死亡したあと、後継者の蔣介石が共産主義者を抹消しようとする準備をしていた時においてさえも、なお国民党と協力させようとしたのであつた。

こういう方針においてスターリンがさらにもっと頑固になつて来たのは、この方針がスターリンにとつて大きな対抗者であつたトロツキーとの間の論争になつて来たからであつた。他の多くの点においてもそうであつたが、この点にかんしてもモスコ政府における国内の権力闘争は、ロシアの国家的利益よりも、屢々優先的に扱われたのである。ス

ターリンの政策は、蔣介石が一九二七年に中国共産主義者の蜂起を撃滅した時に失敗した。かくて、中国におけるソ連の影響力は実質的には一九四五年までなくなってしまうのである。一九三〇年代までに蔣介石は彼の権力をかためつつあった。壊滅しかかっていた中国の共産主義者は湘南において勢力を復活し、さらに蔣介石の追及をのがれて、延安において毛沢東の指導の下に体制をたてなおすのに成功した。毛沢東は、それまでの中国共産党の指導者たちと違ってソヴェエトの傀儡ではなく、当時既にモスコウの政策上の勧告に対して、不信の念をいなく傾向をもっていたのである。

ソ連が中国において勢力の拡張に成功する機会は、一九三〇年代の半ばまでに、日本の進出がモスコウ政府に及ぼす圧力によって、次第に奪われて行くように思われた。躊躇しつつ而もゆっくりと、スターリンは満洲における東支鉄道を日本に譲渡して行った。日本政府の勢力拡張政策を抑えこもうという希望から、彼は蔣介石政府に接近して行った。また日本の勢力がこのように拡大して来たことは、ソ連とアメリカ合衆国との間に、共通の利害関係を醸成しはじめた。それ故我々は再び、ロシアとアメリカ関係の敘述にもどることにしよう。

（七） 第一次大戦の終了から米国のソ連政府承認迄

二つの世界大戦の間のアメリカの外交政策は、基本的には孤立主義的であった。国際的交誼を重んじようとするウィルソンの実験が失敗した事に対するアメリカの世論の反撥は、孤立主義的な傾向を奨励したのであって、そのため積極的な外交政策を推進しようとする政治家がいたとしても、それを実行することが出来なかったのである。さらに

また、十九世紀におけると同じように、かような政策を強制する理由もないように思われた。クーリッジ大統領が述べたように、アメリカ合衆国のビジネスは、文字どおりビジネスであったのである。まったく、アメリカの対外商業活動は、一九二九年の大恐慌までは、迅速に拡大を続けて行ったのである。アメリカのロシアに対する無関心は、イデオロギー上の紛争によって変形し、モスコウ政府への敵意へと変わって行った。

レーニンとスターリンの下におけるコミンテルンの活動、アメリカの共産党をも含めて外国の共産党のモスコウ政府への従属関係の確立、ボルシェヴィキたちの伝統的なアメリカの自由主義的諸制度に対する反対、おなじくボルシェヴィキたちの国内および国外におけるアメリカ人の商業上の利益に対する反対、またソヴェト政府が帝制時代のロシアの負債に対するアメリカの請求権を認めようとはしなかったこと、さらにこれにワシントン政府の保守主義的な傾向が結びついて、アメリカ合衆国のソ連に対する政策を一九三三年に至るまで保守主義的なものに、そしてさらに敵対的なものにしたのであった。ワシントン政府は、この年に至るまでソヴェト政府の承認を拒否していたのであって、この年に至るまで、ソ連とアメリカの外交関係は、其の意味においては存在してはいなかったのである。もっとも、この間にあっても商業に従事するアメリカの諸会社はソ連に相当多額の技術援助をしているし、また、第一次世界大戦後、アメリカからソ連におくられた食糧は、数百万のロシア人が飢え死にするのを救ったのであった。ソ連側としても、対アメリカ関係の工作にそれほど熱心であった訳ではない。何故ならば、ボルシェヴィキたちにとっては、アメリカは共産主義の目標実現を妨げる第一の敵ではなかった。彼らにとっては、イギリスの方がむしろ、大きな障害物であったのである。

だがやがて日露戦争において日本が勝利を占め、また第一次世界大戦前のドイツが、強大な国家として脅威ある国

家となつて来た時に、ソヴィエト・アメリカの外交関係は、改善の方向へと向いはじめたのである。アメリカのアジアやラテン・アメリカに対する孤立主義は、ヨーロッパに対する孤立主義ほど完全なものではなかった。その理由の一つとして考えられる事は、アメリカの実際の影響力を行使するに当って大きな役割を果すアメリカの海軍や海兵隊は、ヨーロッパにおけるよりも、これらの地域における方が、すくない犠牲で活動出来たし、また、これらの地域の住民から、それほど嫌われてはいなかったからである。ヨーロッパはアメリカ人がそこから離れて逃げて来た地域である。またヨーロッパはアメリカの友好国であるイギリスやフランスの支配下にあるもののように思えたからである。そういう訳で、一九三一年に日本の勢力拡張が満洲において始まり、一九三五年、日本の勢力がさらに北支まで進出すると、アメリカ政府は、直接的な干渉をせずにこれを阻止しようと考えるに至った。また、ヒットラーのドイツが大いなる勢力となつてイギリスやフランスの覇権に挑戦しはじめた時、アメリカ政府はこれを阻止しようと考へたのである。

ソヴィエト政府も日本とドイツに対して同じ様な警戒の姿勢をとつた。スターリンは他国を説得して、ドイツと日本に対抗せしめようとしていたし、あるいは、すくなくとも、他国が同盟を結んでソヴィエトに敵対することをなからしめようとしていた。

一九三三年にスターリンは、ソ連との外交関係を設定しようとするルーズベルトの希望に応じようと望むようになった。米ソ両国とも日本の拡張政策に関心をもちようになつた。ルーズベルトは、ボルシェヴィズムに対して彼の前任者がもつていたほどの嫌悪と回避の気持をもつてはいなかった。彼はソ連との間に外交関係がひらかれれば、アメリカ合衆国内の共産主義の活動に対するソヴィエトの支持を停止させるであろうという希望をもつていたが、其の希

望は裏切られた。そして其の後一九四一年までは、ソ連とアメリカとの関係は、密接ではなかったが、通常のものであった。両国関係が緊密化したのは、この年の六月独ソ戦がはじまって以後のことである**。

* Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique*, Tome I (Éditions Gallimard, 1961), pp. 430, 431.

** Armin Rappaport, *A History of American Diplomacy* (Macmillan Publishing Co., INC., 1975), p. 362.